

関係機関とつながる活動

アセスメント

- ・通常学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント
サポートミーティングによって必要とされたケースをアセスメント
- ・読み書きスクリーニング検査（小学校）
小2後半～小3前半に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う（小1に行うやり方もあり現在リサーチ中）
スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて精査する
必要に応じて個別介入（ビジョントレーニング、音韻処理のトレーニング、ブライントッチの練習など）を行う
- ・クラスの状況の把握
QU検査（WEB版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有
小中連携プログラムの一環として、新中1生のクラス編成に生かす
- ・就学時健診等の未就学児のアセスメント
発達支援センター通所の年長児、2次検査におけるWISCなど
必要に応じて発達支援センター年中児の新版K式
各子ども園や発達支援センターにおける行動観察および情報交換・コンサルテーション
- ・特別支援やことばの教室に在籍している小6児のアセスメント
中学における支援の方向性の参考にするために、病院等で検査を受けていない児童を対象にする

子どもを中心とした信頼できる「つながり」

サポートミーティング 小学校

- ### サポートミーティングにて情報の整理
- 1～2回/月程度（学校の状況に合わせて）実施。
 特別支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする。
 客観的な情報も参考に検討する。
 下記のように情報を整理。必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて臨機応変に情報共有して補完する。
- 担任が特別支援 Co に困っているケースを相談。
 - 特別支援 Co が選んだケースをサポートミーティングで検討。
 - 必要に応じて、アセスメント、加療リグ、行動観察等の対処を検討。**
 - をふまえて子どものニーズに合わせた配慮や工夫：
 - ・支援シート類の工夫
支援関係の書類を、学校、支援センター、教育委員会等で共通のものを共有できるように工夫できないか？
 - ・教室での合理的配慮等の検討
筆記具・補助具や教材、座席の配置、漢字の覚え方、声のかけ方などの工夫
 - ・担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討
休みがちな子、休んでいる子、登校をしづる子などに対する個別的介绍の検討も含む

関係者面談（仮名称） 中学校

- ### 関係者面談（仮）にて選択肢の整理
- 年度内欠席累計20日～30日頃（ケースの状態に合わせて適宜調整）に実施。長期不登校になりそうなケースが対象。
- 保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて可能であれば関係者が1時間程度の関係者面談（仮名称）をする。
- 面談の中では…
 「学校に朝から放課後まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する。
 学校に関係する選択肢については、今まで通り各学年団や担任、通級、保健室等、学校でできることを、学校の先生が直接説明する。
 支援センター、その他についての選択肢は松田（セター職員）が直接説明する。
- 必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を開いて経過を追う。
- 関係者面談であげられた選択肢について、保護者の判断でタイミングを見計らって保護者から本人に伝える。
- 部活などの先生の御都合や保護者の仕事の御都合等で時間がなかなか取れない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれの選択肢を別々に保護者に説明する。
- 関係者面談の時間設定のための調整は、今のところ松田（セター職員）が行う。

個別的介入

- 下記の活動の場所はケースによって
- ・支援センター
 - ・学校
 - ・自宅（自律を促す活動のみ）
 - ・社教などその他
- などの中から最適な場所を選ぶ。
- ・保護者への加療リグ
なかなか学校へ行けない子どもたち、いわゆる“生きづらさ”をかかえる子どもたち等の保護者に対する加療リグ。
家族内への介入をすることで、間接的に子どもたちをサポートする。
状況によって親子、夫婦、家族全体での合同で加療リグすることも検討。
保護者が変わることによって子どもも変わることが多い事実に着目。
 - ・子どもへのブレンド-や加療リグ
可能な限り、上記の保護者との加療リグを優先。保護者担当、子ども担当による並行した介入も状況によって検討する。
状況によって子ども本人に対する直接的な介入。ブレンド-や芸術療法、感覚統合療法、動作法等、各種技法を使ったブレンド-を行う。
言語で表現できそうな子どもであれば、言葉による加療リグを行う。
 - ・自律を促す活動
その子の興味に合わせた各種体験活動などを通して、なるべく外に出て家族以外の人と話す機会を持つ。
誰かと一緒に「楽しい」「やりたい」という気持ちを味わったり、「達成感」を得る経験。
外に出て歩くことによる体力維持。
数学（算数）、英語、漢字などの基礎的な学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう。
基礎的な学習活動を通して、復帰後の学力面での負担軽減を目指す。

集団への直接介入

- ・サポートグループアプローチ
友人からのサポートが有効と思われる小学生への介入
必要に応じて友人、保護者、担任、養護教諭等と協力して行う
- ・WOWW プログラム
「いいところ探し」や「スケーリング」を利用した小学生のクラス全体への介入
小6に行う場合は、小中連携プログラムの一つとして行う
必要に応じて担任と協力して行う
- ・心理教育
保健室の先生方と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心理教育的な活動のシステムをつくる（養護教諭と共同）
小学校から中学校まで一貫したプログラムを作成し、先生方の転勤後もプログラムとして引き継がれるような形を作る

教員、保護者向けの研修活動

- ・不登校、自殺予防、特別支援などに関する教職員向けの研修の企画・運営
- ・ストレスマネジメント、不登校などに関する保護者向けの研修の企画・運営

自分らしさを取り戻していく過程をサポート

～自分のできる範囲で自分のできることをやればそれでいい...と思えるように～

M まあ **I** いっか **N** なんとかなる **T** とりあえず **Y** やってみよう

保護者や本人が少しでも安心できるかかわり

- ・ ご本人、ご家族、学校、その他関係者間で相互信頼関係の構築
- ・ 対象の子どもの様子をよく見ながら、本人と活動内容・場所を随時細かく調整
- ・ 今まで通り、学校の先生、通級、SC、その他関係者が分担して本人の希望に沿った形の支援を考える。そのチームに支援センターが加わることにより、より選択肢が増えるイメージ。

人とのつながり

安心・安全・居心地の良い居場所の提供

内側から湧いてくるもの

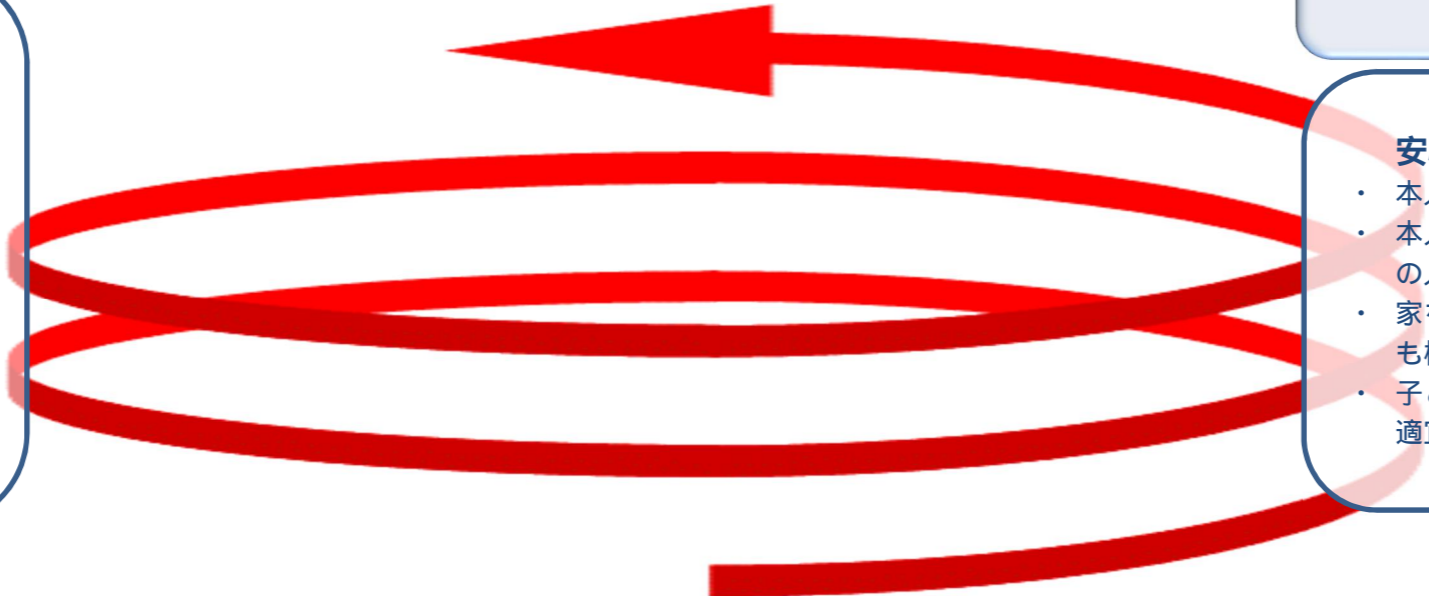
子どもの内側から湧いて出てくる感覚を大切に

目標志向型アプローチではなく、本人の様子をよく観察しながら「一步後ろからリードする感覚」によるかかわり

- ・ 本人の興味に合わせた活動の提示
大人側も遊び心を使って多種多様な活動を提示できるように努力する
本人の好きなこと、楽しいことの把握
- ・ 内側から湧いて出る感覚を大切にする
「楽しい!」「やりたい!」「好き!」「居心地が良いから居たい!」「やりたくない」「ただ見ていたい」「ダラダラしたい」「早く帰りたい」 など

安心・安全な環境や人とのつながりの中で

- ・ 本人との信頼関係の構築
- ・ 本人のペースで、可能であれば家を出て家族以外の人と安心して過ごす経験をつむ
- ・ 家を出るのが難しければ必要に応じて家庭訪問も検討
- ・ 子ども達どうしの小集団への介入やサポートを適宜行う



学びの喜び

意欲が出る学びの工夫

本人の学習に対する希望・意欲が大前提
ゲーム的な要素を取り入れる、短く区切るなどの取り組みやすくなるような工夫
全部で終わる工夫
「読み書き」に対する工夫
視覚的に達成感を得るための工夫など

わかるところから個別的な学び

本人の希望・意欲に合わせた学習活動
小学校低学年の場合は、お金の計算、時間、漢字など将来を見越した学習を意識

いつか学校に戻るつもりであれば...
中学生はなるべく英語や数学を中心に
小学生はなるべく算数や漢字を中心に

学校やクラスとのつながり

本人が希望するのであれば、学校やクラスとのつながりを工夫

オンライン授業の視聴
先生や友人とのかかわりの工夫など
必要に応じて支援センター職員が学校の別室で本人と時間を過ごすことも検討する
学校の要望や必要に応じて、本人と学校のパイプ作りに協力することも検討する

進路の準備

本人の様子を見ながら、早い時期から進路についての話

支援センターでの活動